

第 III 群 座長のまとめ

三重大学 耳鼻咽喉科

坂倉康夫

本セッションは指定演題「ネブライザー療法の専用薬剤」である。

現在2～3の薬剤がネブライザー専用として開発中であるが、薬剤をネブライザーを用いて鼻腔に投与する場合の問題点は；

- ① エアロゾル粒子の発生装置。
- ② 薬剤粒子の鼻腔内動態，粒子径，沈着，排泄。
- ③ 生体への影響，とくに鼻腔粘膜障害と経鼻粘膜吸収。
- ④ 適応疾患と薬剤の効果。

があげられよう。

臨床的には④ 適応疾患と薬剤の効果が問題であり，鼻アレルギーに対してはステロイドの定量噴霧剤があるが，慢性副鼻腔炎に対する専用薬剤はない。慢性副鼻腔炎に対するネブライザー療法は広く用いられているので，専用薬剤の開発が待たれるところである。松永会長の指定演題に対する意図もここにあったものと思われる。

本セッションでは専用薬剤開発の基礎となる諸問題が検討された。

高野先生には昨年第13回研究会で「エアロゾル療法の工学的課題」と題して特別講演を頂いた。今回の演題もその延長線上にあるものである。すなわち，薬液の吸収特性が発振子の周波数依存性であるというスペクトル特性を示すことを明らかにし，エアロゾル薬剤の選択に際して考慮すべき重要な因子であることを強調した。医用エアロゾルの研究がまさに学際的であることを示すもので，貴重な講演であり，今後の研究の発展によってこの領域への益々の裨益があらんことが望まれた。

佐藤先生は抗コリン剤定量噴霧エアロゾルの鼻腔内分布を模型鼻腔を用いて定量的に検討し，鼻腔内沈着は薬効よりみて適応範囲内であることを明らかにした。

山田先生は鼻科用FOMの繊毛運動に及ぼす影響をマウス鼻中隔培養細胞を用いて検討した。その結果からFOM3%までが臨床的に許容範囲であることを示唆した。また薬剤を鼻腔に投与する場合繊毛運動にとって浸透圧も重要な因子であることを示した。

大橋先生はS-CMCが軽度の慢性副鼻腔炎の上顎洞粘膜上皮の繊毛打頻度を増加させる作用があることを示した。

薬液の生体に及ぼす影響を，あるいは繊毛運動に及ぼす影響をin vitroで検討する方法は有用ではあるが，その結果を生体に適応するさいには粘液の存在を十分に考慮せねばならないと思われる。

ネブライザー療法の日常臨床上の普及度よりも有用度の高いネブライザー専用薬剤の開発と提供がまたれる。